

## 現代の性情報環境および発育発達に応じた 性教育実施に向けて

—小学生の性情報環境に関する調査—

富 樫 健 二\*・川 島 美 奈\*

A study of sexual information environment  
in elementary school children

Kenji TOGASHI, Mina KAWASHIMA

### 緒 言

思春期は人間の一生の中で最も変化に富む時期である。特に著しい身体的発育と精神的発達の不均衡、情緒不安定、自立性の発達に伴う大人社会や権威への反発などに加えて、性的関心の急速な高まりが目立つ。一方で、児童・生徒が見聞する性風俗や性的事象、接する性情報の量は増大しつつある。性に関わる社会問題が点在する現代社会の状況に加え、子供達が身近に接するテレビ・書籍・雑誌などから得られる情報の中にも営利だけを目的とした性情報、つまり、人間の性を商品化し、購買力を煽るために興味本位な記事や場面を扱った情報が大量に流されている。

このように氾濫した性情報と自己の性的関心の高まりの中で、思春期の児童・生徒は誤った性意識、性に対する価値観を形成していく危険性も考えられる。一方、早期化する性成熟や、急速に展開する性情報環境の中における学校側や家庭側の対応は遅れており、子供の発育発達段階やとりまく環境に応じた性教育の実施は十分になされていないのが現状である。人間の性を人格の基本的部分とし、生理的・心理的・社会的な側面から総合的にとらえ、科学的な知識を与えるとともに、子供達が生命の大切さを理解し、また人間尊重・男女平等の精神に基づく正しい異性観をもち、望ましい行動が取れるようにすることによって、人格の完成、豊かな人間形成に資する性教育<sup>1)</sup>を行っていく必要がある。

そこで本研究は、思春期前期にある小学校高学年児童、およびその保護者、担任教師を対象に、1) 子供達の性成熟状態および2) 身近な情報媒体であるテレビ・雑誌から流れる性情報との接触状況について、3) 学校・家庭における性教育の現状・問題点について調査し、これからの発育発達段階、性情報環境に応じた性教育実施に向けての基礎資料を提供することを目的とする。

---

\* 三重大学教育学部保健体育科

## 方 法

### 1 調査の方法

#### 1) 対 象

津市内の小学校4校の協力を得て、在学中の小学5・6年生、およびその保護者、担任教師を対象とし、選択肢方式と自由記述方式を併用した質問紙調査法を用いた調査を行った。

#### 2) 調査内容

調査票は、児童用、保護者用、担任教師用の三種類を用意した。調査の名称は「小学生の心とからだに関する調査」である。なお、調査紙については紙面の都合上割愛するが、主な事項を以下に示す。

##### 児童用

精通・初経の有無、テレビ視聴時間、良く見る(読む)テレビ番組・書籍・雑誌・漫画、テレビ・書籍・雑誌・漫画を見ていて性的な表現があるか、友人とどのようなことについて話をするか、心やからだのことで知りたいこと、家庭や学校で性の悩み・知識について相談したことがあるか、性に関する不安や悩み

##### 保護者用

精通・初経の有無の認知、テレビ・書籍・雑誌・漫画などから得られる性情報が子供に対して与える影響について、子供達の性に関する情報源はどこだと思うか、子供から性の悩み・知識について相談を受けたことがあるか、親から子供に性について教えたり話し合ったりすることがあるか、家庭での性教育の必要性、性教育を家庭で行いにくい理由、学校における性教育の必要性について、子供に教えて欲しい性教育内容、性教育を始める時期、性教育とはどんな教育だと思うか

##### 担任教諭用

テレビ・書籍・雑誌・漫画などから得られる性情報が子供に対して与える影響について、子供達の性に関する情報源はどこだと思うか、子供から性の悩み・知識についての相談を受けたことがあるか、学校での性教育の必要性、性教育を始める時期、性教育の内容と実施している教科名、性教育を学校で教える理由、性教育とはどんな教育だと思うか

#### 3) 実施方法

児童用の調査票については原則として教室で配布し、一定時間(担任教諭が設定)を取ってその場で記入、回収していただいた。保護者用については、児童が持ち帰り留め置いて記入してもらった調査票を、再び児童経由で回収するという形をとった。担任教諭用については、自由に回答してもらった。

## 4) 回収の状況

配布した調査票は児童用、保護者用それぞれ576票、担任教師用19票で、不完全票を除いた有効票は、児童522票、保護者423票、担任教師17票であった。回答者別にみた配票数、有効回答数及び回収率は、表1の通りである。

表1 回収の状況

回答者	配票数	有効回答数	有効回答率
小学5年生	277	229	82.7%
小学6年生	299	293	98.0%
5年生保護者	277	195	70.4%
6年生保護者	299	228	76.3%
担任教諭	19	17	89.5%
	1171	962	82.2%

## 2 回答者の属性

表2は、回答者を性別、続柄別にみたものである。児童側は5年生男子116名(50.7%)、女子113名(49.3%)、6年生男子148名(50.5%)、女子145名(49.5%)と、男女ほぼ半数ずつになっている。一方、保護者側については、5年生の父親12名(6.2%)、母親182名(93.3%)、6年生の父親18名(7.9%)、母親208名(91.2%)であった。片親家庭や両親のいない児童のことを考慮し、回答者を特定しなかったものの、結果として日常的に接する機会が多い母親が圧倒的多数を占めた。担任教諭は5年生担任、男性3名(37.5%)、女性5名(62.5%)、6年生男性3名(33.3%)、女性6名(66.7%)であった。

表2 回答者の属性

(%)

児 童			保 護 者			担 任		
	5年生	6年生		5年生	6年生		5年生	6年生
男 子	50.7	50.5	父 親	6.2	7.9	男 性	37.5	33.3
			母 親	93.3	91.2			
女 子	49.3	49.5	そ 他	0.5	0.0	女 性	62.5	66.7

## 結果及び考察

## 1. 性成熟

本調査では性成熟を生理(身体)的に判断する項目として「精通」「初経」をとりあげ、その発現率を調べた。男子全体で、精通「経験あり」1.9%、「経験無し」31.8%、「分からない」63.6%で、女子全体で、初経「経験あり」26.0%、「経験無し」64.7%、「分からない」8.1%

となっている(表3)。一方、男子を持つ保護者全体のうち、息子に精通が「もうあった」と言い切っているのが0.5%、「もうあったようだ」3.3%、「まだないようだ」28.2%、「まだない」53.0%、「分からない」15.4%で、娘に初経が「もうあった」と言い切っているのが33.3%、「もうあったようだ」0.5%、「まだないようだ」4.8%、「まだない」59.5%、「分からない」1.4%となっている(表4)。男子児童では女子児童に比べ分からないと答えている率が高いため実際の精通の有無についての判断は難しいが、保護者の把握状況からみても(表4)数パーセント程度の発現率であると予想される。しかし、用語を知らなかったなどの性教育の実施状況にもかかわるが、こうした質問に対し正確に判断できていない男子児童は同年代の女子児童に比べ性に関する精神的成熟度は低いものと思われる。一方、一般に生殖機能に関する発達(身体的性成熟)は男子よりも女子の方が早く生じることが知られており<sup>2)</sup>、また、初経の有無についての確に判断している女子児童は精神的成熟度も高いと考えられることから、性に関するからだの発育(身体的性成熟)と心の発達(精神的性成熟)とは密接に結びついているものと思われる。さらに、5年生と6年生の女子では、初経「経験あり」が9.7%、38.6%と、4倍程度の開きがあることから、女子ではほぼこの学年を境として身体的・精神的な性成熟が始まるものと考えられる。

中学2年生に対する同様の調査をみると、男子で精通経験あり51.8%、女子に至っては初経経験あり92.7%という結果であった<sup>3)</sup>。二次性徴の発現について、女子では、早熟者で小学校4年生頃からみられ、11歳から14歳の4年間に直線的に増え、中学2年生でほとんどの者にその発現がみられるようになる。一方男子は、早熟者で女子に1年遅れの小学校5年生頃から、中学校期になると急速に増え始め、女子に1~2年遅れの中3、高1でその発現のピークを迎える。このように身体的・精神的な性成熟の早熟化が進み、実質的な変化が小学校4・5年生から現れ始めていることから、からだの変化や二次性徴に関する教育の早期化について検討することも必要であろう。

保護者が子供の性成熟についてどの程度把握しているかについては、女子ではほぼ断定的にあったか否か把握しているようだが、男子の方は、やや曖昧な回答が多く、子供の性成熟に関する現状を掴みきっていない様子がうかがえる(表4)。また、「精通・初経があったことをどうやって知ったか」という質問に対し、男子を持つ保護者は、「子供から聞いた」2名、「洗濯をしていて」4名、「子供に聞いた」1名で、女子を持つ保護者は、「子供から聞いた」58名が圧倒的に多く男女間で差がみられた。

精通・初経発現時に誰に打ち明けたかについては、男子全体(5名)で、「母親」20.0%、「話さない」80.0%で、女子全体(67名)で、「父親」1.4%、「母親」90.0%、「先生」2.9%、「その他」5.7%、「話さない」0%となった(表5)。全体的に父親よりも日常的に接する機会が多い母親に話す者が多く、女子は特に同性ということもあって、母親に話す者が9割を占める。一方、男子は人数が少ないので断定できないが、同性である父親に話すこともなく、8割が誰にも話さないという結果となり、先の項とも関連して性に関する羞恥心や親子間のコミュニケーションの消極的態度がうかがえる。

## 2. 性情報環境

子供達の性に関する情報源を調べるため、テレビ、書籍、雑誌、漫画など子供達が日常的に接触する機会の多いメディアについての質問を行った。テレビ視聴時間は、「見ない」4.2%、

表3 精通（男子）、初経（女子）の有無（児童） (%)

	有り	無し	分からない	無回答
5年生男子	2.6	28.4	63.8	5.2
6年生男子	1.4	34.4	63.5	0.7
5年生女子	9.7	78.8	8.8	2.7
6年生女子	38.6	53.8	7.6	0.0

表4 子供の精通・初経の有無（保護者） (%)

	もうあった	もうあったようだ	まだないようだ	まだない	分からない
5年生男子	0.0	3.0	19.2	64.7	13.1
6年生男子	0.9	3.5	36.0	43.0	16.6
5年生女子	13.5	1.0	7.4	77.1	0.0
6年生女子	50.0	0.0	2.6	44.8	2.6

表5 精通・初経があったとき誰に話したか（児童） (%)

	父親	母親	先生	その他	話さない
5年生男子	0.0	40.0	0.0	0.0	60.0
6年生男子	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
5年生女子	7.1	71.4	0.0	21.5	0.0
6年生女子	0.0	94.6	3.6	1.8	0.0

その他…姉、祖母

「1時間」10.2%、「2時間」25.5%、「3時間」34.3%、「4時間以上」25.8%であった。「3時間」、「4時間」を合わせると6割を越えることから、かなり長時間テレビに接しておりその影響の大きさもかなりのものと予想される。具体的に視聴している番組内容についてはここでは記述しないが、ドラマ・娯楽番組の中には性的表現や多少暴力的・卑俗的な内容を含む番組もみられる。ジャンル別に整理してみると、女子5年生ではアニメとドラマの割合が半分ずつだが、6年生になるとドラマの割合が非常に高くなり、同時に娯楽番組の割合も増えてくる。身体的、精神的性成熟に伴い女子児童の恋愛に関する関心が高くなっていく傾向がうかがえる。一方男子の方は、5年生ではアニメが圧倒的に多く、次に娯楽番組の順だが、6年生になるとそれが逆転するようになる。

「テレビで性的場面を見ることがあるか」という質問では、児童全体の平均で「よくある」3.8%、「時々ある」22.0%、「あまりない」46.0%、「全然ない」26.3%であった。一方、保護者に対して「子供が性的場面のあるテレビ番組を見ることがあるか」という質問をしたところ、「よくある」7.3%、「時々ある」60.8%、「あまりない」26.7%、「全然ない」3.1%であった（表6）。両者を比較してみると、保護者側はテレビ番組から受け取る性的表現に対する懸念の高さがうかがえるが、子供側は性的表現に無頓着なのか、性的なものともみなす基準が緩和されているのか、保護者ほど敏感にはなっていないようである。

よく読む雑誌・漫画について、ここでは具体的には記さないが男子は圧倒的に週刊誌型の少年漫画が多く、女子は月刊誌型の少女漫画雑誌が多かった。内容は少年漫画はスポーツ（サッカー・バスケットなど）、冒険物、ギャグ物が多く、少女漫画はほとんどが恋愛物であるが、両者とも中には性的描写のある場面も多少みられる。6年生女子では、ティーン・エイジを対象とした雑誌を読んでいる者もみられた。

子供に対して「書籍・雑誌・漫画で性的場面をみることがあるか」という質問をしたところ、「よくある」5.4%、「時々ある」11.7%、「あまりない」35.8%、「全然ない」45.8%であった（表7）。テレビに比べると、書籍・雑誌・漫画の方が性的場面に接する機会が少ない印象をもっていることがうかがえる。また、テレビ（表6）、書籍・雑誌・漫画（表7）とも男子児童より女子児童の方が性的場面に接する機会が多いと感じているようである。以上のように、子供達に身近なマスメディアには常に性的情報の影が見え隠れしている傾向がみられ、意識すると否とに関わらず、行動選択・態度決定・価値観形成に何らかの影響を与えるというマスメディアの特性を考えると、親（家庭）や教師（学校）としては何らかの措置を講ずる必要性があるように思われる。

一方、保護者と担任教師に対して「性的場面のある雑誌や漫画を読むことについてどう思うか」という質問をしたところ、保護者側は「少しならかまわない」という答えが51.1%と最も多いのに対し、担任教師側は52.9%が「かなり問題がある」としており、子供と身近な性情報との接触について、教師よりも保護者の方が楽観的に考えているように推測できる（表8）。

上記のことを踏まえ、保護者と担任教師に対して、子供達が性に関する情報をどこから得ていると思うか質問したところ、保護者・担任教師とも、1「テレビ」、2「雑誌・漫画」、3「友

表6 テレビを見ていて性的場面はでてくるか（児童）  
子供が性的場面のあるテレビ番組を見ることがあるか（保護者） (%)

	よくある	時々ある	あまりない	全然ない
5年生男子	7.0	17.3	34.6	40.2
6年生男子	3.4	21.6	41.9	28.4
5年生女子	4.5	21.2	59.3	15.0
6年生女子	1.4	26.9	48.9	21.4
児童平均	3.8	22.0	46.0	26.3
保護者	7.3	60.8	26.7	3.1

表7 書籍・雑誌・漫画を読んでいて性的場面をみることがあるか（児童） (%)

	よくある	時々ある	あまりない	全然ない
5年生男子	5.2	12.9	23.3	57.7
6年生男子	4.1	8.0	30.4	53.4
5年生女子	8.0	11.5	48.7	31.8
6年生女子	4.8	14.5	41.4	39.3
児童平均	5.4	11.7	35.8	45.8

表8 小学生が性的場面のある雑誌や漫画を読むことについてどう思うか  
(保護者、担任) (%)

	特に問題ない	少しなら構わない	かなり問題有り	非常に問題有り
保護者	17.2	51.1	22.5	1.9
担任	5.9	17.7	52.9	0.0

表9 子供達の性に関する情報源はどこだと思うか (複数回答)(保護者、担任) (%)

	テレビ	雑誌・漫画	友達	学校での性教育	家庭での性教育	兄・姉	その他
保護者	42.3	34.9	33.0	29.5	6.6	2.3	0.7
担任	58.8	47.0	47.0	17.6	5.8	11.7	11.7

達」の順位であった(複数回答、表9)。「家庭での性教育」と回答したのは、保護者、担任教師とも6.6%、5.8%と少数であることから、家庭における性教育の実施率の低さ、期待度の低さがうかがえる。一方、「学校での性教育」と答えた保護者は29.5%であるのに対し、担任教師17.6%であることから、保護者の学校教育に対する期待度の高さと、実施率との間にギャップがあることが推察される。家庭や学校での性教育は子供達が正しい性のあり方を理解する上での情報源としては機能しておらず、むしろ身近なメディアに影響を受ける可能性が高いことを示唆しているものと思われる。

保護者と担任教師に対して、テレビ・書籍・雑誌・漫画等の性情報の影響として考えられる7つの見解(a.性についての知識が増える、b.勉強に集中できなくなる、c.愛や性についての考え方がゆがむ、d.性体験を持つ青少年が増える、e.非行や犯罪の原因になる、f.誤った性知識を持つようになる、g.ストレスの解消になる)について意見を聴取した。保護者側が肯定的傾向を示した見解は、「a.性についての知識が増える」「f.誤った性知識を持つようになる」、否定的傾向を示した見解は、「b.勉強に集中できなくなる」「g.ストレスの解消になる」、賛否両論の傾向を示した見解は、「c.愛や性についての考え方がゆがむ」「d.性体験を持つ青少年が増える」「e.非行や犯罪の原因になる」であり、担任教師側が肯定的傾向を示した見解は、「c.愛や性についての考え方がゆがむ」「f.誤った性知識を持つようになる」、否定的傾向を示した見解は、「a.性についての知識が増える」「b.勉強に集中できなくなる」「g.ストレスの解消になる」、賛否両論の傾向を示した見解は、「d.性体験を持つ青少年が増える」「e.非行や犯罪の原因になる」であった。「性についての知識が増える」という見解に差が生じているのは、ここで質問している“性知識”のとらえ方を“人間の性”というような大きな捉え方をしているか(教師側)、いわゆる一般的な性情報と捉えているか(保護者側)の違いであるように思われる。教師側は身近なマスメディアからの性情報は、誤った性知識が身につくだけで、本当の(正しい)意味での性についての知識は増えないという否定的な考えであり、保護者側は一般的な性知識は身近なマスメディアによって得ているであろうと肯定的な回答になったのではないかと推測される。また、「c.愛や性についての考え方がゆがむ」「f.誤った性知識を持つようになる」という質問に対しても差が生じたが、先の項でもあったが保護者側は身近なマスメディアから入ってくる性情報に対し、楽観視している傾向があるのに対し、教師側の懸念は大きいようで

ある。

身近な情報収集源として友人との会話があげられるが、子供達に対して友人との会話内容7項目 (a. テレビ・漫画、b. 勉強、c. 遊び・遊びの約束、d. 社会の出来事、e. 家族、f. 性的なこと、g. 好きな男の子・女の子) についてどのくらい話すか質問したところ、「よく話す」が最も多い項目は、「テレビ・漫画」58.4%、「遊び・遊びの約束」45.8%となっており、これらが

表 10 テレビ・書籍・雑誌・漫画等の性情報が青少年に与える影響について

a. 性についての知識が増える		(保護者・担任) (%)			
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	24.3	30.5	26.9	4.0	
担任	23.5	5.9	47.0	17.6	
b. 勉強に集中できなくなる					
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	4.7	19.4	54.4	6.4	
担任	0.0	17.6	64.7	11.8	
c. 愛や性についての考え方がゆがむ					
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	13.5	25.3	38.5	6.1	
担任	52.9	23.6	17.6	0.0	
d. 性体験を持つ青少年が増える					
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	13.5	29.5	36.2	4.0	
担任	5.9	47.0	35.3	5.9	
e. 非行や犯罪の原因になる					
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	12.3	23.6	40.0	6.6	
担任	11.7	41.2	41.2	0.0	
f. 誤った性知識を持つようになる					
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	23.2	31.4	27.0	2.8	
担任	58.8	29.4	5.9	0.0	
g. ストレスの解消になる					
	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
保護者	0.5	3.3	28.2	53.0	
担任	0.0	11.8	52.9	23.5	



会話の中心的話題と考えられる。一方、「話さない」が最も多い項目は、「性的なこと」80.1%、「社会の出来事」44.1%、「好きな男の子・女の子」41.9%であった。しかしながら、「性的なこと」については学年が上がるにつれ「話さない」と答えている率が下がってきており、また、「好きな男の子・女の子」については、男子は非常に消極的だが、女子は7割以上が話しているという構造になっている。

### 3. 性教育

子供に対して、「心やからだについて知りたいことはありますか」と質問したところ、全体の6割程度が「i. 知りたいことはない」と回答した。一方、知りたいことについてみると、「e. 恋愛」「f. 結婚」に関しては女子の回答頻度が高く、「c. 異性のこころ」「d. 男と女の付き合い方」に関しては6年生の回答頻度が高かった。「g. 赤ちゃんが生まれるまで」は、6年生男子を除いて回答頻度が高かった（複数回答、表11）。また、「いまだんな性に関する不安や悩みを持っていますか」という質問では、やはり同じように6割程度が「悩みはない」と回答した（複数回答、表12）。不安・悩みについてみると、「b. 友達と比べて……」（17.2%）、「発毛」（8.4%）ということが全般的に気になっているようである。また男子は「変声」（17.5%）、女子は「a. 胸のふくらみ」（14.4%）に高い割合を示している。6年生女子では40%弱が初経を経験していることから、「初経」（おそらく生理も含まれる）についての悩みの割合が高

表11 心やからだのことで知りたいこと（複数回答）（児童） (%)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i
5年生男子	10.3	2.6	5.2	6.0	3.4	3.4	10.3	5.2	65.5
6年生男子	4.7	1.4	10.1	10.8	9.5	6.1	6.8	0.7	66.2
5年生女子	0.9	8.8	9.7	9.7	15.9	14.2	23.0	0.9	62.8
6年生女子	1.4	6.2	14.5	15.2	19.3	15.9	10.3	0.7	58.6
全体	4.2	4.6	10.2	10.7	12.3	11.0	12.1	1.7	63.2

a 男のからだど仕組み、b 女のからだど仕組み、c 異性のこころ、d 男と女のつきあい方、e 恋愛、f 結婚、g 赤ちゃんが生まれるまで、h その他、i 知りたいことなし

表12 性に関する不安や悩み（複数回答）（児童） (%)

	初経	精通	発毛	a	変声	b	異性	c	悩みなし
5年生男子	0.0	0.9	9.5	1.7	17.2	17.2	0.9	6.9	60.3
6年生男子	0.0	3.4	10.1	0.0	17.9	13.1	3.4	4.0	64.2
5年生女子	8.0	0.0	4.4	14.2	1.8	20.4	5.3	6.2	58.4
6年生女子	10.3	0.7	8.9	14.5	0.7	19.3	3.4	10.3	57.2
全体	4.6	1.3	8.4	7.5	9.4	17.2	3.3	6.9	60.2

a 胸のふくらみ、b 友達と比べて大きい・小さい、早い・遅い、c 恋愛・結婚

く(10.3%)、また、「結婚・恋愛」についても高い割合(10.3%)を示していることから、第二次性徴に伴う身体的・精神的悩みや関心の多さがうかがえる。一方、全体を通して6割程度が「心やからだ」について、また「性に関する不安や悩み」について「知りたいことはない」、「悩みはない」と答えたことに関して、まだ第二次性徴の発現を生じていない者も多いため、自分の心やからだに興味・関心のない割合が高かったものと考えられる。しかしながら、これから第二次性徴へ向かうことも考えると、急速な発育・発達に伴う不安や悩みを抱かせないよう、自分の心やからだについて正しい知識・認識を形成できるような保健教育が必要となってくるものと思われる。

子供に対して、「性の知識・悩みについて家で質問・相談したことがあるか」という問いに対し、全体の59.2%が「全然ない」と回答した。特に5年生より6年生にその傾向が顕著であり、さらに6年生男子では7割を上回っている。質問・相談したことがある子供のうちだれに相談したかは、女子では「母親」が75~80%と圧倒的多数を占め、男子では6割が「母親」2割強が「父親」という割合になっている(表13)。同様に「担任の先生に性の知識・悩みについて質問・相談したことがあるか」という質問をしたところ、全体の8割が「全然ない」と回答しており、5年生よりも6年生の方が消極的傾向が強い。

一方、保護者に対して、「子供から性の知識・悩みの質問・相談を受けることがあるか」という質問をしたところ、全体の53.0%が「全然ない」と回答している。また、担任に対して、「子供から性の知識・悩みについて質問・相談を受けるか」という質問では、「あまりない」64.7%、「全然ない」23.6%となっている。逆に、「自分(親)から子供に性について教えることがあるか」という質問に対し、男子よりも女子の保護者の方がやや積極的傾向がみられるものの、「よくある」3.1%、「時々ある」23.9%、「あまりない」32.9%、「全然ない」37.0%で、7割近くがほとんど子供と性について話したりする機会がないという結果であった。「全然ない」と回答した保護者に対し、その理由を質問したところ、「機会がない」42.8%、「話さなくても自然にわかる」15.7%、「どう話せばよいか分からない」13.2%、「まだ早い」11.3%となっていた。以上の結果より、子どもの多くが全く性について悩みがないことも考えられるが、悩みがあったとしても羞恥心から聞けなかったり、日頃から親子、担任-児童間でコミュニケーションする環境が整っておらず、家庭や学校という身近な社会基盤ですらも悩みが解決しにくい構図がうかがえる<sup>4)</sup>。

さらに、相談・質問に対し「どのように答えたか」については、「子供が理解できるように答えた」59.4%が最も多いが、「適当にごまかして答えた」が13.4%となっているところから、

表13 相談した場合、家族の誰に相談したか(児童) (%)

	父	母	姉	兄	妹	弟	祖父	祖母	その他
5年生男子	22.6	58.1	0.0	6.5	1.6	1.6	3.2	4.8	0.0
6年生男子	22.4	61.3	4.1	4.1	2.0	0.0	0.0	0.0	2.0
5年生女子	3.1	75.4	4.6	3.1	0.0	0.0	1.5	9.3	1.5
6年生女子	5.0	81.3	6.3	1.2	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0
全 体	12.1	70.3	3.9	3.5	0.8	0.4	1.2	5.1	0.8

答え方に自信のない（正しく理解してくれるか分からない、自分の知識が不十分）、または答えに躊躇してしまう親も多いのではないかと推測できる。このことは「性教育を行いきにくい理由があるとすれば何だと思うか」という質問に対して、「教えるきっかけを作るのが難しい」41.1%、「親に指導する十分な知識がない」16.6%、「子供がどこまで知っているか分からない」15.5%となっていることから明らかである。しかしながら、家庭での性教育について、保護者全体では必要だと「思う」77.3%、「思わない」8.6%、「分からない」13.9%と行った方がよいと思っている保護者が大半であった。

担任教師に対し、学校における性教育の必要性について質問したところ、全員が必要だと「思う」と答えた。保護者に対しても「学校の性教育についてどう思うか」という質問をしたところ、「ぜひ教えてほしい」47.5%、「できれば教えてほしい」50.2%となり、ほとんどの親が学校での性教育を希望、または期待している傾向がうかがえた。「教えてほしい」と積極的  
回答をした保護者に対し、「小学生に教えてほしい内容」について質問したところ、「c. 男女のからだのしくみや働き」92.9%、「d. 妊娠・出産のしくみ」48.9%、「b. 男女の心理」37.2%が高い割合を示した。「h. 純潔の大切さ」については20.5%であった。男子保護者よりも女子保護者の方が高い割合を示した項目は、「d. 妊娠・出産のしくみ」「e. セックス」「f. 避妊や中絶」「h. 純潔の大切さ」であった（複数回答、表14）。

担任教師と、学校で性教育を「教えてほしい」と回答した保護者に対して、性教育を始める時期について質問したところ、教師側は「幼稚園・保育園」47.1%、「小学校低学年」35.3%で、保護者側は、「小学校高学年」40.2%、「小学校中学年」23.2%であった（表15）。性教育の早期教育開始について教師の8割以上が必要を感じているのに対し、保護者側は3割弱で、6割以上は現状ぐらいでよいと考えていることがうかがえる。教師側は発育発達の段階に応じ

表14 小学生の性教育で教えてほしいこと（複数回答）（保護者）

	a	b	c	d	e	f	g	h	その他
5年生男子	14.4	38.1	93.8	44.3	8.2	7.2	23.7	17.5	5.1
6年生男子	24.7	34.5	92.9	40.7	12.3	8.8	25.6	11.5	1.7
5年生女子	16.1	46.2	94.6	53.7	25.8	20.4	23.6	24.7	1.0
6年生女子	20.9	31.8	90.9	57.2	20.0	17.2	33.6	29.0	3.6
全体	19.3	37.2	92.9	48.9	16.4	13.3	26.8	20.5	2.9

a 男女のつきあい方、b 男女の心理、c 男女のからだの仕組みや働き、  
d 妊娠・出産の仕組み、e セックス、g 妊娠や中絶、h 性に関する病気、i 純潔の大切さ

表15 性教育を始める時期（保護者、担任）

	幼・保	小・低	小・中	小・高	中学校	高等学校	その他
保護者	10.7	18.4	23.2	40.2	7.2	0.2	0.0
担任	47.1	35.3	0.0	5.9	0.0	0.0	11.7

その他…内容に応じて段階的に、内容によってはいつからでも

て性教育はなされるべき（いつとといった基準はない）であるといった考え方が多いのに対して、保護者側はからだの急激な変化の起こる（第二性徴の始まる）時期から初めて欲しいと思っているものと思われる。

小学校での性教育の現状を知るため、担任教師に対し「教科・道徳・学級活動の性に関する内容一覧（小学校）」より小学5・6年生での内容（からだの成長、二次性徴、月経、射精、生命の誕生、異性との関わり、男女の役割、性の不安や悩み、家族の役割、性の被害と加害、テレビ・雑誌・漫画の功罪、エイズ）を、どの教科の時間で実施しているか質問した。「からだの成長」「二次性徴」「月経」「射精」は主に保健で、「家族の役割」は主に家庭科、「生命の誕生」は保健・理科・特別活動、「異性との関わり」「男女の役割」は保健・道徳・特別活動と複数の教科にわたって行われている。実施率が低かった項目は、「テレビ・雑誌・漫画の功罪」「性の被害と加害」「エイズ」「性の不安や悩み」であった。全般的に生理的側面の内容（自然科学的内容）については高い実施率を示しているが、心理的、特に社会的側面（心理・社会科学的内容）についての内容は、実施率が低くなっている。

表 16 性教育の内容をどの科目で実施しているか（担任） (%)

	保 健	理 科	社 会	家 庭	道 徳	特別活動	その他	未実施
体の成長	77.8	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.5
二次性徴	78.9	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.3
月 経	84.1	5.3	0.0	0.0	0.0	5.3	0.0	5.3
射 精	84.1	5.3	0.0	0.0	0.0	5.3	0.0	5.3
生命の誕生	31.9	40.9	0.0	0.0	4.5	13.7	0.0	4.5
異性との関わり	33.3	0.0	0.0	0.0	16.7	16.7	0.0	22.2
男女の役割	16.7	0.0	0.0	4.2	33.3	29.2	0.0	8.3
性の不安や悩み	31.6	0.0	0.0	0.0	5.3	5.3	0.0	42.1
家族の役割	9.5	0.0	0.0	47.6	19.0	4.8	0.0	4.8
性の被害と加害	5.0	0.0	5.0	5.0	5.0	15.0	5.0	50.0
テレビ・雑誌・漫画の功罪	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	17.6	5.9	52.9
エイズ	5.0	5.0	5.0	0.0	5.0	20.0	0.0	50.0

担任教師に対して、「性教育を学校で行いにくい理由があるとすれば何だと思うか」という質問をしたところ、回答頻度の高い項目は「教師に指導する十分な知識がない」41.2%、「教師間に性教育に対する共通理解がない」23.5%であった。教師の日頃の教材研究の程度や身近に教材が存在するかや、教師間のコンセンサスの度合いも性教育の実施に影響を与えているようである。また、今後現職教員を対象とした研修制度の充実や教員養成系大学における保健科教育関連のカリキュラムの見直しなども必要であろう。

最後に、保護者及び担任教師に対して、「性教育とはどんな教育だと思うか」という質問に対し回答頻度の高かった項目をみると、保護者側は、「性についての正しい知識を持たせる教育」79.4%、「生命の大切さを認識させる教育」68.3%、「異性を理解し協力の精神を育てるための教育」50.5%で、教師側は、「生命の大切さ認識させる教育」100.0%、「性について

の正しい知識を持たせるための教育」94.1%、「異性を理解し、協力の精神を育てるための教育」82.3%、「人間尊重の大切さを認識させるための教育」64.7%であった。両者とも、同じような項目が抽出されているが、保護者側は性教育とは性の知識に関してを教育していると感じているようであり、教師側は性教育とは様々な「人間の性」に関する教育、つまり「人間教育」なのだという考えを持っているように思われる。

## まとめ

本研究では発育発達段階や氾濫しつつある性情報環境に応じた性教育実施に向けての基礎資料を提供することを目的とし、思春期前期にある小学校高学年児童、およびその保護者、担任教師を対象に、1) 子供達の性成熟状態および、2) 身近な情報媒体であるテレビ・雑誌から流れる性情報との接触状況について、3) 学校・家庭における性教育の現状・問題点について調査した。主な結果は以下の通りである。

1. 小学校高学年児童の性成熟に関しては男女間で差異がみられ、女子で身体的、精神的に早熟である傾向がうかがえた。また、性成熟に関する親の把握度は女子児童の親で高く、男子で低い結果であった。性に関するコミュニケーションは女子児童と母親との間で高く、次に男子児童と母親であり、父親と子供との間の性に関するコミュニケーションは少なかった。

2. 子供とマスメディアとの接触状況は緊密であり、受動的に性的な情報を得ている傾向がうかがえた。マスメディアの中で性的な情報と接触している率が高いと感じているのは女子児童であり、ここでも女子児童の精神的な早熟傾向がみられた。こうした性情報環境、性情報との接触について親は多少なら構わないという傾向がみられ、教師側はかなり問題があるとする率が高かった。学校・家庭での性教育は子供が正しい知識を得る性情報環境としては十分に機能していないことが明らかとなった。

3. 性に関する悩みは6割の児童がないと答え、また心やからだについても同程度の児童が知りたいことはないと答えた。しかしながら、第二性徴に伴う身体的変化に関する悩みを抱える子供もおり、急速な発育・発達に伴う悩みや不安を少しでも減らすような教育が必要であると思われた。一方、こうした悩み・関心があっても羞恥心から聞けなかったり、日頃から親子、担任－児童間でコミュニケーションをとる環境が整っていない様子がうかがえた。また、親、教師とも性教育を行う上での知識が不十分であることを指摘しており、教師に対しては何らかの研修制度や教員養成系大学での保健科教育に関するカリキュラムの見直し等も必要であると思われた。

## 引用・参考文献

- 1) 性の指導総合事典 江口篤寿 他 ぎょうせい p14 1992
- 2) 平成5年度学校保健統計調査報告書 文部省 p3 1994
- 3) 性教育はこれでよいか 内山 源 ぎょうせい p19-20 1994
- 4) 平成5年度版青少年白書 総務庁 p5-111 1994